

第3次那珂川町総合振興計画

なかがわ『わくわく』プラン 2035

なかがわの 輝きとうるおいにみちあふれた わくわくするまち

総論・基本構想

(案)

令和 年 月

那 珂 川 町

目 次

第1部 総 論	1
第1章 なかがわ『わくわく』プラン 2035 とは.....	2
1 計画策定の背景と目的	2
2 計画の構成と期間	3
3 計画づくりで重視したこと	4
第2章 那珂川町の特性と課題.....	5
1 町の概要	5
2 活かすべき強み	10
3 踏まえるべき社会情勢	13
4 反映すべき町民ニーズ	16
5 まちづくりの課題	26
第2部 基本構想	31
第1章 那珂川町の将来像.....	32
1 まちづくりの基本姿勢	32
2 将来像	33
第2章 計画の体系と方針.....	34
1 計画の体系	34
2 基本目標ごとの方針	35

第 1 部 総 論

第1章 なかがわ『わくわく』プラン 2035 とは

1 計画策定の背景と目的

総合振興計画とは、地方自治体（都道府県・市区町村）が、将来どのようなまちになることを目指すのか、そして、そのためにどのようなことをするのかをまとめたものです。

地方自治体は、分野ごとに様々な計画を策定していますが、総合振興計画は、その中で一番上に位置する「最上位計画」であり、最も重要な計画です。

本町では、これまで2次にわたる総合振興計画を策定し、計画的なまちづくりを進めてきました。

第2次那珂川町総合振興計画では、『人・もの・自然が融和し みんなで手を取り合い 元気を生み出すまち』という将来像を掲げ、これを実現するための様々な取り組みを積極的に進めてきました。

しかし、近年、人口減少の加速、大規模な自然災害の発生、デジタル化・脱炭素化の進展をはじめ、社会情勢は大きく変化しているほか、これらに伴い、町民ニーズも大きく変化しています。

こうした社会情勢や町民ニーズの変化に的確に対応し、将来にわたって持続可能な那珂川町をつくっていくため、新たなまちづくりの指針として、第3次那珂川町総合振興計画を策定します。

また、本町では、人口減少が進む中、これまで2期にわたる総合戦略を策定し、人口減少対策を進めてきました。

本町では、“まちづくりの重点＝総合戦略（人口減少対策）”ととらえており、今回、第3次那珂川町総合振興計画と第3期那珂川町総合戦略を一体的に策定することとします。

なお、本計画が、多くの町民に親しまれ、『なかがわの 輝きと
うるおいにみちあふれた わくわくするまち』という将来像を
みんなで実現していくため、計画の愛称を、「なかがわ『わくわく』
プラン 2035」と定めます。

2 計画の構成と期間

本計画は、「基本構想」、「基本計画」、「実施計画」の3つから構成されています。それぞれの構成と期間は、次のとおりです。

計画の構成

基本構想

本町が10年後に目指す将来像と、それを実現するための計画の体系や方針など、今後のまちづくりの大きな方向性を示したものです。

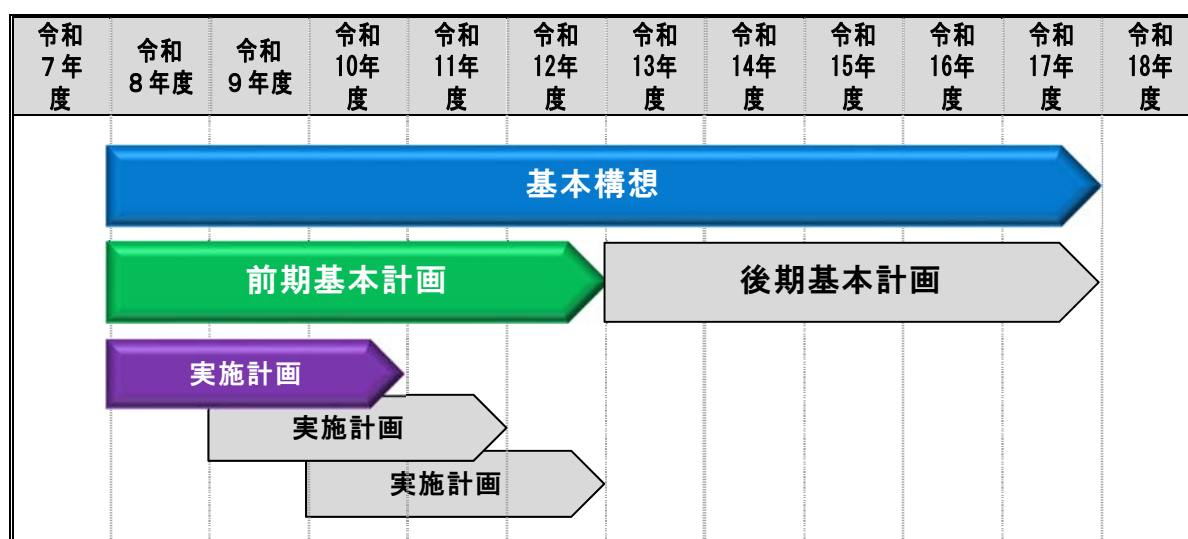
基本計画（総合戦略等含む）

基本構想に基づき、今後行う主な取り組みを示したものです。
社会情勢や町民ニーズの変化に対応できるよう、前期基本計画と後期基本計画にわけて策定します。
なお、この基本計画には、総合戦略をはじめ、行財政改革・DX推進に関する方針を含むものとします。

実施計画

基本計画に基づき、今後行う具体的な事業や事業費などを示したものです。
別途策定し、毎年度見直ししながら、事業を実施していきます。

計画の期間



3 計画づくりで重視したこと

本計画の策定にあたっては、第2次那珂川町総合振興計画の検証、町の地域特性の再整理、社会情勢の把握はもちろんのこと、『オールなかがわ』による計画の推進を重視して策定しました。

計画策定で重視したこと

『オールなかがわ』による計画の推進
～みんなが“自分事”として那珂川町の未来をつくる～

そのために

★「読んでわかる計画」の策定

町民が本計画を読んで理解できるよう、町民が読むことを第一前提とした、シンプルでわかりやすい構成・内容・表現とし、「読んでわかる計画」として策定しました。

★多くの町民の意見の反映

町民が共感・共有できる内容とするため、町民・中高生・小学生を対象としたアンケート調査、各種団体・高校生・子育て世代・まちづくり団体等を対象とした意見交換会『なかがわまちづくりトークカフェ』などを行い、多くの町民の意見の反映に努めました。

★すべての部署の参画・連携

町の最上位計画、総合的なまちづくり計画として、町のすべての部署が参画・連携し、那珂川町をよりよいまちにするための取り組みを考えました。

第2章 那珂川町の特性と課題

1 町の概要

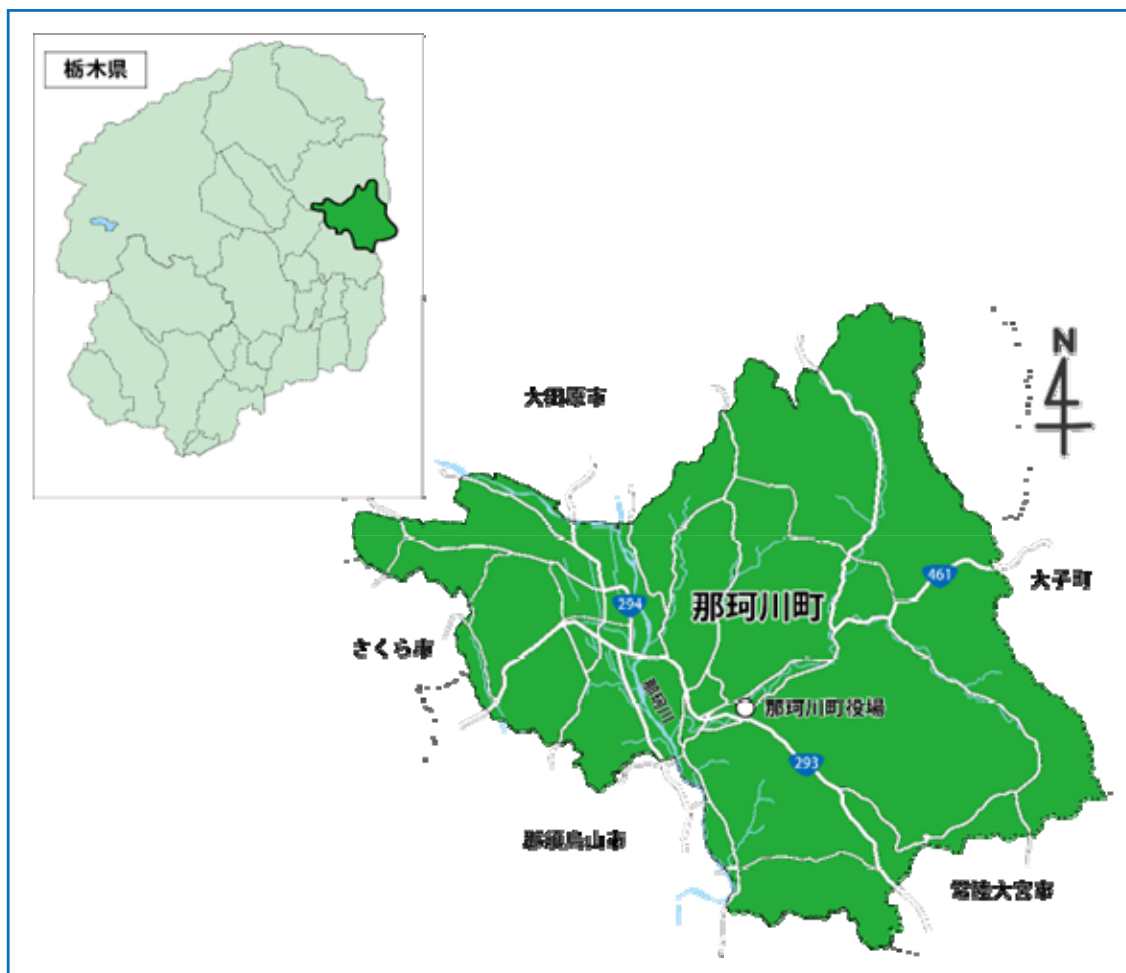
(1) 位置と地勢

栃木県の東北東に位置し、東は茨城県に接しており、県内の町では2番目に広い面積を持つ。

本町は、栃木県の東北東に位置し、東は茨城県大子町と常陸大宮市、南は那須烏山市、西はさくら市、北は大田原市に接しています。

東西約 23km、南北約 19km の広がりを持ち、総面積は 192.78km² で、県内の町では那須町に次いで2番目の広さとなっており、八溝山系の山地が大半を占め、そのほかは丘陵地帯と那珂川沿いに広がる平坦地帯などで構成されています。

那珂川町の位置と概要



(2) 町の歩み

かつて那須^{なすのくに}国の政治・文化の中心地として栄えた歴史を持ち、昭和の大合併で馬頭町、小川町が誕生し、平成の大合併で2町が合併して那珂川町が誕生した。

本町は、古墳時代において、関東地方で最も古い古墳である駒形大塚古墳をはじめ、前方後方墳が次々につくられるなど、特色ある文化が育まれるとともに、奈良・平安時代には、那須郡の役所である那須^{なす}官衙^{かんが}が置かれ、那須^{なすのくに}国の政治・文化の中心地として栄えました。

中世以降は、武茂^{むものしょう}荘（馬頭地区）を除く那須郡ほぼ全域が那須氏に支配されていました。

馬頭地区は、戦国時代には常陸佐竹氏領、江戸時代には水戸徳川領となり、小川地区は、江戸時代中頃から烏山藩領、旗本領、天領として治められました。

明治政府成立後、廃藩置県により宇都宮県を経て栃木県の管轄下となり、多くの村にわかれていましたが、昭和の大合併により馬頭町、小川町が誕生し、それぞれ特色ある地域資源を活かしながら、昭和・平成と、魅力あるまちづくりを進めてきました。

そして平成の大合併の時代を迎え、平成 17 年 10 月 1 日に両町が合併して現在の那珂川町が誕生し、令和 7 年に合併 20 周年を迎えました。

(3) 総人口

総人口は 15,215 人で、県内一のスピードで減少が進んでいる。

国勢調査による本町の総人口（令和2年）は 15,215 人となっており、平成 27 年から令和 2 年の直近 5 年間の減少率は 10.3% と、これまでで最も高く、減少が加速してきています。

減少率を国・県及び県内の町と比べると、県内の町の中で最も高く、国平均や県平均を大幅に上回っています。

総人口と減少数・減少率

年	人口（人）	減少数（人）	減少率（%）
平成 12 年	20,999	775	3.6
平成 17 年	19,865	1,134	5.4
平成 22 年	18,446	1,419	7.1
平成 27 年	16,964	1,482	8.0
令和 2 年	15,215	1,749	10.3

資料：国勢調査

※参考：令和 7 年 10 月 1 日現在の住民基本台帳人口は 13,877 人。

県内の町・県・国との比較（直近 5 年間の減少率が低い順）

町 名	平成 27 年の 人口（人）	令和 2 年の 人口（人）	減少数 （人）	減少率 （%）
上三川町	31,046	30,806	240	0.8
壬生町	39,951	39,474	477	1.2
高根沢町	29,639	29,229	410	1.4
野木町	25,292	24,913	379	1.5
芳賀町	15,189	14,961	228	1.5
那須町	24,919	23,956	963	3.9
市貝町	11,720	11,262	458	3.9
益子町	23,281	21,898	1,383	5.9
茂木町	13,188	11,891	1,297	9.8
塩谷町	11,495	10,354	1,141	9.9
那珂川町	16,964	15,215	1,749	10.3
県平均	1,974,255	1,933,146	41,109	2.1
国平均	127,094,745	126,146,099	948,646	0.7

資料：国勢調査

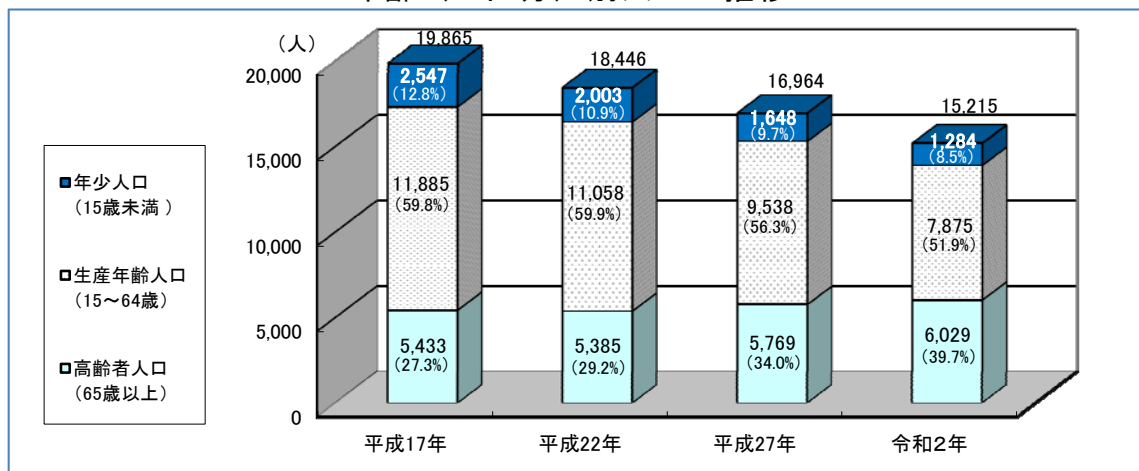
(4) 年齢別人口

本町の少子高齢化は、国・県よりも大幅に進んでおり、特に、高齢化が急速に進行している。

年齢（3区分）別の人口の推移をみると、15歳未満の年少人口と15歳～64歳の生産年齢人口の減少、65歳以上の高齢者人口の増加が目立っています。

また、それぞれの比率（令和2年）を国・県と比べると、年少人口比率は国平均や県平均を約3.5ポイント下回り、高齢者人口比率は国平均や県平均を10ポイント以上上回り、本町の少子高齢化は、国・県よりも大幅に進んでおり、特に、高齢化が急速に進行していることがうかがえます。

年齢（3区分）別人口の推移



注) 総人口には年齢不詳を含む（比率は年齢不詳を除いて算出）。

資料：国勢調査

年齢（3区分）別人口比率の国・県との比較（令和2年）

	国平均	県平均	那珂川町
年少人口 (%)	12.1	12.0	8.5
生産年齢人口 (%)	59.2	58.8	51.9
高齢者人口 (%)	28.7	29.2	39.7

注) 比率は年齢不詳を除いて算出。

資料：国勢調査

(5) 産業別就業者数

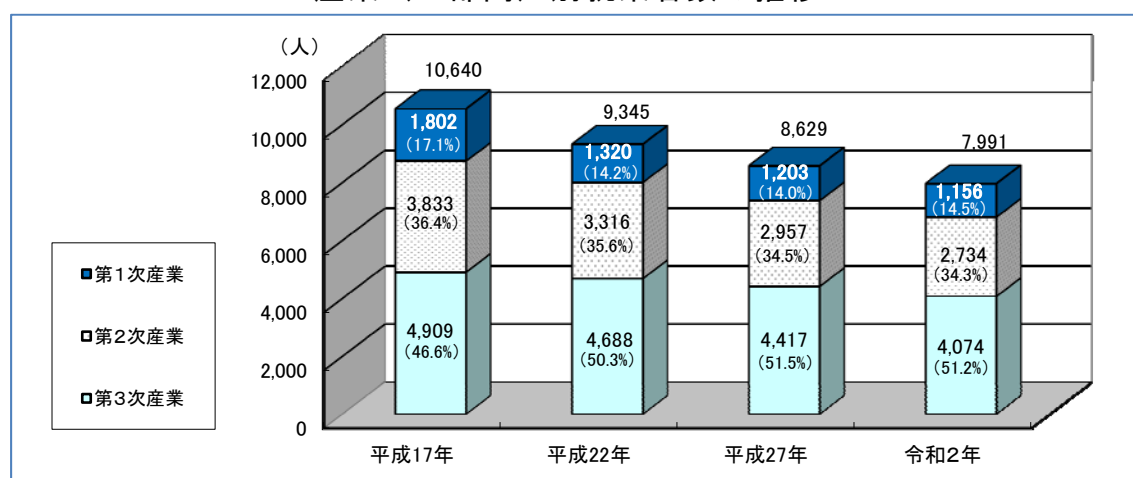
すべての産業で就業者数が減少している。また、第1次産業就業者の比率が目立って高く、農業が主要産業の一つであることがあらためて認識される。

本町の就業者総数（令和2年）は7,991人で、総人口の減少とともに減少傾向にあります。

産業（3部門）別の就業者数の推移をみると、農業・林業などの第1次産業、建設業・製造業などの第2次産業、これら以外の第3次産業ともに減少しています。

それぞれの比率（令和2年）を国・県と比べると、第1次産業就業者の比率が目立って高く、農業が主要産業の一つであることがあらためて認識されます。

産業（3部門）別就業者数の推移



注) 就業者総数には分類不能を含む（比率は分類不能を除いて算出）。 資料：国勢調査

産業（3部門）別就業者比率の国・県との比較（令和2年）

	国平均	県平均	那珂川町
第1次産業 (%)	3.5	5.4	14.5
第2次産業 (%)	23.7	31.3	34.3
第3次産業 (%)	72.8	63.4	51.2

注) 比率は分類不能を除いて算出。

資料：国勢調査

2 活かすべき強み

1 清流那珂川に代表される美しい自然環境・景観

本町は、八溝山系の森林と里山が大部分を占め、町の中心部には清流那珂川が流れ、その流域には水田を中心としたのどかな田園風景が広がるなど、美しい自然環境・景観を誇るまちであり、まさに「日本の原風景」が残されています。

特に、町名の由来となった那珂川は、アユ釣りのメッカとして広く知られるとともに、その水質のよさなどから、東の四万十川といわれており、本町の自然のシンボルとなっています。

また、本町の北部に位置する小砂地区は、独特の棚田が点在し、豊かな森とともに心癒される里山風景が残るほか、「小砂焼」などの地域資源が評価され、NPO法人「日本で最も美しい村」連合^{※1}に栃木県で唯一加盟しています。



注) 写真やイラストはイメージ。
印刷時に適切なものと差し替え。

2 史跡や資料館、美術館などの貴重な歴史文化資源

本町には、日本の古墳時代を考える上で重要な史跡である「那須小川古墳群」をはじめ、「唐御所横穴」、「那須官衙遺跡」、「那須神田城跡」の4件の国指定史跡のほか、数多くの貴重な文化財があります。また、これらの文化財の保護等を行う広域的な拠点として、「那珂川町なす風土記の丘資料館」があり、文化財等の保存や収蔵・展示、普及・啓発等の様々な活動を行っています。

さらに、本町は、3つの美術館があるまちとしても知られています。このうち、町の施設である「馬頭広重美術館」は、世界的に有名な建築家である隈研吾氏が設計したもので、歌川広重の肉筆浮世絵・版画等が展示されており、全国から多くの人を訪れています。



^{※1} 失ったら二度と取り戻せない日本の農山漁村の景観・文化を守りつつ、最も美しい村としての自立を目指す運動を行う連合組織。平成17年に7町村からスタートした。

3 多様な産業と豊富な特産品

本町は、古くから農業を主要産業として発展し、現在、米をはじめ、イチゴやトマトなどの野菜、ナシやブドウなどの果樹の生産、畜産等が行われています。林業では、八溝材の生産が行われているほか、水産業として、ホンモロコの養殖が行われています。

工業では、大手製造業の工場など様々な事業所が立地し、町の活力や町民の雇用を生み出しているほか、木質バイオマスを活用した、マンゴーやコーヒーの栽培、ウナギの養殖も行われています。

商業では、馬頭・小川の両市街地に商店街があるほか、国道沿いに小売店・飲食店等が点在し、多くの人々に利用されています。

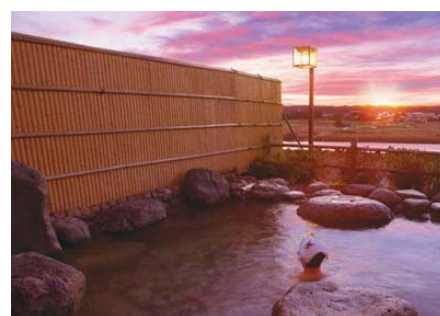
また、こうした多様な産業を背景に、農水産物やその加工品、料理、菓子・スイーツ類、さらには「小砂焼」等の伝統工芸品など、38商品が「那珂川町ブランド認定品」として認定されています。



4 道の駅や温泉をはじめとする魅力ある観光資源

本町の観光資源としては、清流那珂川に代表される美しい自然環境・景観や貴重な歴史文化資源、おいしい食べ物や「小砂焼」等の特産品が中心となっていますが、このほかにも、道の駅や温泉、キャンプ場、ゴルフ場、祭り・イベントなど、人々をひきつける多彩で魅力ある観光資源があります。

特に、「道の駅ばとう」には、とれたての地場産農産物等の直売所や地場産食材をふんだんに使ったレストラン、本町の観光情報の発信・案内を行う観光センターなどがあり、年間を通じて多くの人が訪れるほか、「馬頭温泉郷」は、肌がなめらかになる泉質から“美人の湯”として知られ、清流那珂川をのぞむ眺望も美しく、人々の人気を博しています。



5 充実した子育て環境と学校教育環境

本町では、妊娠・出産から子育て期まで切れ目のない支援を行う「かかりつけ保健師」、新生児訪問の際に贈呈する「育児パッケージ」の取り組み、子育て支援住宅「エミナル那珂川」の整備、18歳までの子どもの医療費の助成などの経済的支援、「なかよし子育てアプリ」の導入など、先進的な取り組みを進めてきたほか、令和7年度には、総合的な相談支援等を行う拠点として、「こども家庭センター※2」を設置し、充実した子育て環境にあります。

学校教育においても、学力の向上はもとより、認定こども園から中学校までの学びの連続性を重視した英語教育や国際交流の推進、地域と連携したコミュニティ・スクール※3の取り組みをはじめ、次代を担う子どもたちの育成にも力を入れています。

また、本町には、県立馬頭高等学校がありますが、内陸部では全国唯一の水産科があり、町と連携して特産品開発を行うなど、特色ある教育が行われています。



6 やさしく郷土愛あふれる町民

美しい自然環境・景観や貴重な歴史文化資源に包まれ、古くから育まれ、受け継がれてきた町民のやさしさやあたたかさ、郷土を愛する心は、活かすべき強みの一つといえます。

本計画の策定にあたって実施したアンケート調査の『町への愛着度』において、町に対して“愛着を感じている”という人が、町民・中高生では8割以上、小学生では9割以上にのぼっているほか、『なかがわまちづくりトークカフェ』においても、那珂川町の長所・自慢点として、人がやさしい、人があたたかいという意見が多くあげられています。



※2 これまでの子育て世代包括支援センター（母子保健機能）と子ども家庭総合支援拠点（児童福祉機能）が一体となった、すべての妊産婦・子育て世帯・子どもへ総合的な相談支援等を行う機関。国により、市町村で設置することが努力義務とされている。

※3 学校運営協議会制度。「地域とともにある学校」を目指し、学校と地域・保護者が協力して学校の運営に取り組む仕組み。

3 踏まえるべき社会情勢

1 加速する人口減少と高齢化

わが国では、出生数の減少に歯止めがかからず、少子化が一層深刻化し、これに伴い、人口減少もさらに加速しています。また、高齢化も急速に進み、高齢化率は世界一の水準となっています。

このような中、戦略的な人口減少対策や超高齢社会に即した環境づくりが引き続き国全体の大きな課題となっています。

2 強く求められる危機管理

地震や線状降水帯の発生等による大規模な自然災害の頻発、オレオレ詐欺等の特殊詐欺による被害の増加、子どもや高齢者を巻き込む痛ましい交通事故・犯罪の発生等を背景に、人々の安全・安心に対する意識がさらに高まっており、日々の暮らしの中での危機管理体制の一層の強化が求められています。

3 急進展するデジタル化

民間企業はもとより、地方自治体においてもDX^{※4}が急速に進展し、AI^{※5}やロボットなどのデジタル技術を活用した業務の自動化・省力化、サービスの向上など、様々な変革が進んでいます。

こうしたデジタル化は、これからの社会に必要不可欠なものとして、あらゆる場面でその重要性が高まっています。

※4 Digital Transformation（デジタルトランスフォーメーション）の略。デジタル技術を活用し、業務やサービス、組織をはじめ、様々な仕組みを変革すること。

※5 Artificial Intelligence の略。人工知能。

4 本格化する脱炭素社会への動き

地球温暖化がさらに深刻化し、人類の生存さえ脅かす重大な問題を引き起こす中、世界各国でGX^{※6}の動きが本格化しています。

わが国においても、「2050 カーボンニュートラル^{※7}」を宣言し、温室効果ガス排出量実質ゼロの脱炭素社会の実現を目標としており、あらゆる主体の積極的な取り組みが求められています。

5 厳しさを増す地方の産業・経済

加速する人口減少・少子高齢化等に伴う担い手の減少や高齢化、資材価格の高騰などを背景に、第1次産業従事者の減少、既存商店街の空き店舗の増加、企業の撤退といった状況がみられ、地方の産業・経済は厳しさを増しており、地域全体の活力の再生が大きな課題となっています。

6 求められる共生社会・多様性社会の実現

全国的に地域コミュニティの弱体化が進む中、身近な地域でお互いに支え合いながらともに生きる共生社会の重要性が再認識されています。また、世界的に「ダイバーシティ^{※8}」の考え方が浸透しつつあり、誰もがお互いの違いを認め合い、自分らしく暮らしていくことができる多様性社会の実現が求められています。

※6 Green Transformation（グリーントランスフォーメーション）の略。温室効果ガスを発生させないエネルギーに転換することで、産業構造や社会・経済を変革すること。

※7 主として人間の活動によって排出される二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスの排出量と、森林や植物が吸収する温室効果ガスの吸収量が等しくなること。

※8 多様性を意味する言葉で、年齢や性別、障がいの有無、性的志向・性自認等といった様々な属性を持った人たちが、組織の中で共存している状態のこと。

4 反映すべき町民ニーズ

本町では、計画策定への町民ニーズの反映を重視し、町民・中高生・小学生を対象としたアンケート調査や、町民等との意見交換会『なかがわまちづくりトークカフェ』などを行いました。

その概要と主な結果は、次のとおりです。

アンケート調査の概要

	町民アンケート	中高生アンケート	小学生アンケート
調査対象	18歳以上の町民	町立中学校(2校)と県立馬頭高等学校の生徒全員	町立小学校(3校)の5・6年生の児童全員
配布数	2,000	426	176
抽出法等	無作為抽出	全数調査	全数調査
調査方法	郵送法とWEB方式の併用	WEB方式	WEB方式
調査時期	令和6年6月～7月	令和6年6月	令和6年6月
有効回収数	791	347	172
有効回収率	39.6%	81.5%	97.7%

『なかがわまちづくりトークカフェ』の概要

	内 容
対象者	各種団体、高校生、子育て世代、まちづくり団体、地域おこし協力隊、町の若手職員 計37人
実施方法	調査票(事前記入用紙)の配布・回収と『なかがわまちづくりトークカフェ』(少人数のグループによる気兼ねのない意見交換会)の開催
実施時期	令和6年10月16日(水)・17日(木)・18日(金)
意見交換の内容	【各種団体】 <ol style="list-style-type: none"> ① 団体の現状と課題 ② 今後のまちづくりへの要望・提案(専門分野に関して) ③ 今後のまちづくりへの要望・提案(町全体の視点から) 【個人】 <ol style="list-style-type: none"> ① 那珂川町の長所・自慢点(よいところ) ② 那珂川町の短所・問題点(悪いところ) ③ 今後のまちづくりへの要望・提案(興味のある分野等に関して) ④ 今後のまちづくりへの要望・提案(町全体の視点から)

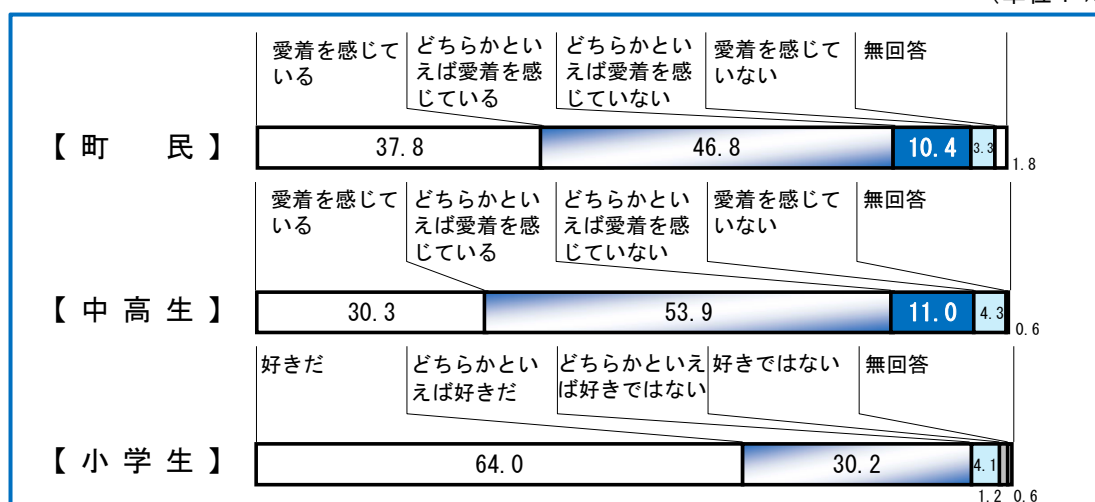
① 町への愛着度と今後の定住意向（町民・中高生・小学生）

■町への愛着度	【町 民】“愛着を感じている”	84.6%
	【中高生】“愛着を感じている”	84.2%
	【小学生】“愛着を感じている”	94.2%
■今後の定住意向	【町 民】“住みたい”	78.6%
	【中高生】“住みたい”	45.3%
	【小学生】“住みたい”	72.7%

町への愛着度は、町民・中高生・小学生ともに8割を超える人が“愛着を感じている”と答えていますが、今後の定住意向は、中高生で目立って低く、「町に愛着は感じているが、住みたいとは思わない」という中高生がかなり存在すると考えられます。

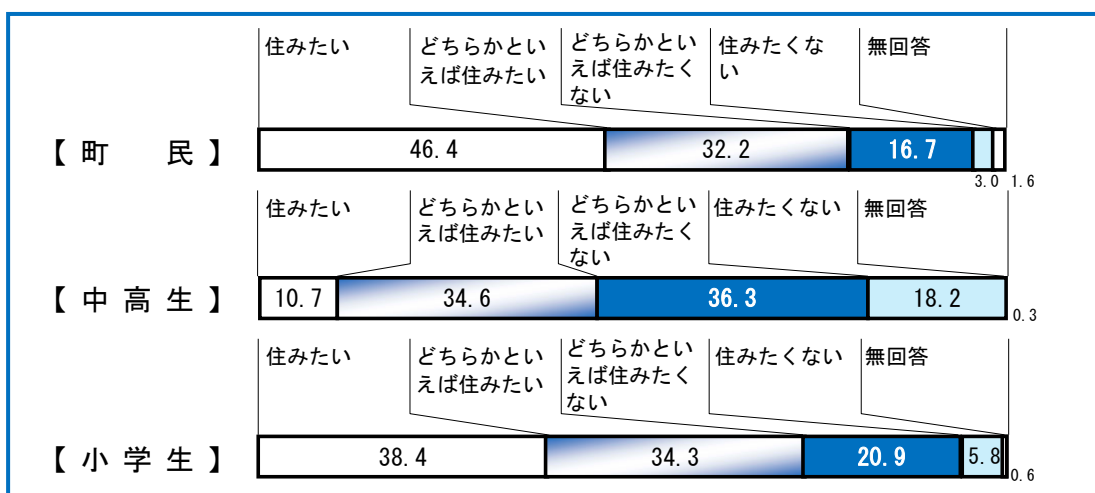
町への愛着度（町民・中高生・小学生）

（単位：％）



今後の定住意向（町民・中高生・小学生）

（単位：％）



② 町の各環境に関する満足度（町民）

■満足度が高い項目

- 第1位 上下水道の整備
- 第2位 消防・防災基盤の整備
- 第3位 生活環境の保全（生活排水処理、公害防止、環境美化等）
- 第4位 情報通信基盤の整備
- 第5位 循環型社会の構築（リサイクル、省エネ、再エネ等）

■満足度が低い項目

- 第1位 空き家対策
 - 第2位 公共交通網の整備
 - 第3位 商工業の振興
 - 第4位 公園緑地の整備
 - 第5位 土地利用
-

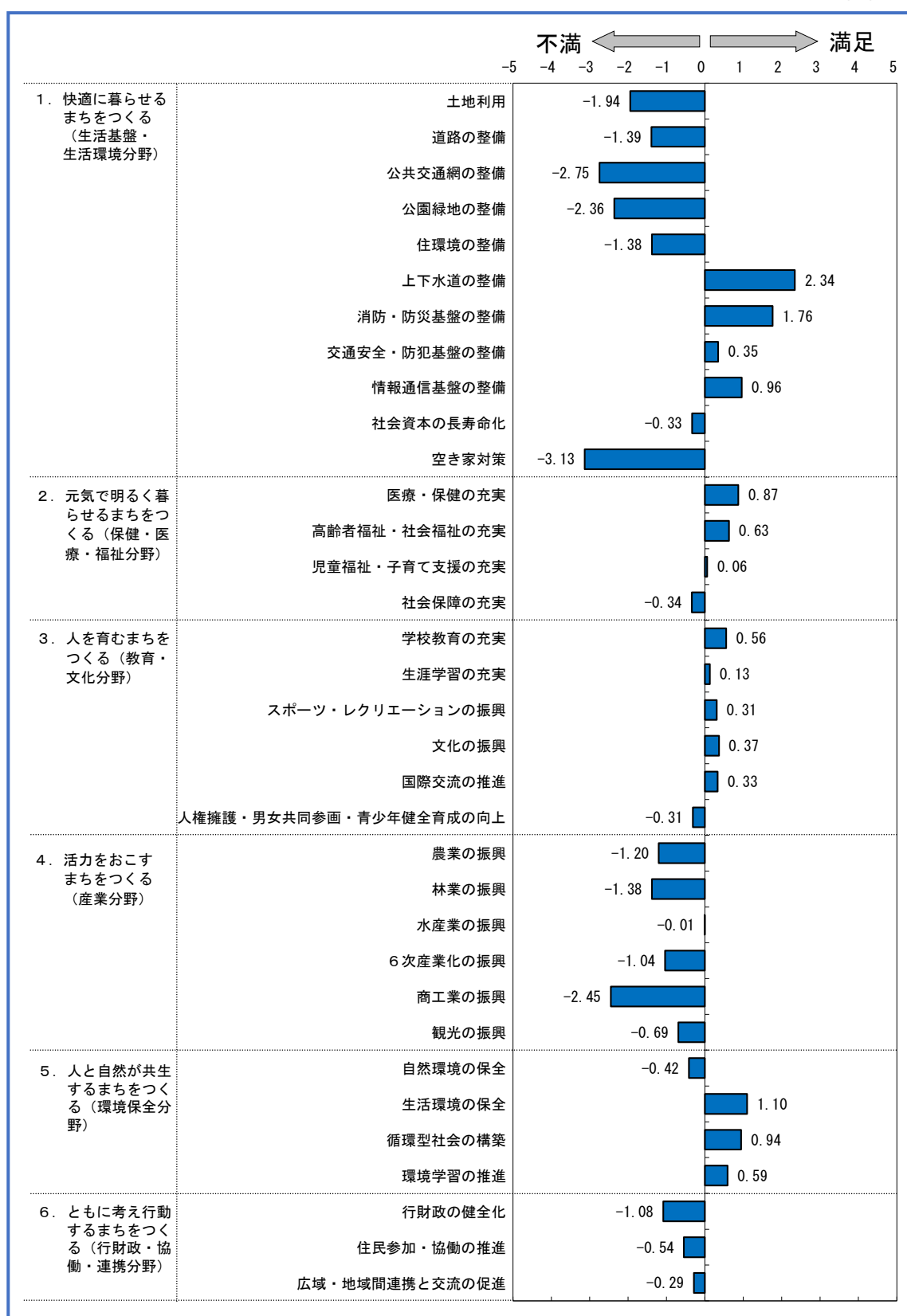
町の各環境（6分野34項目）について、「満足している」から「不満である」までの5段階で評価してもらい、点数化しました。

その結果、上記のとおりで、生活基盤・生活環境分野の生活環境に関する項目をはじめ、保健・医療・福祉分野、教育・文化分野、環境保全分野の満足度が高く、生活基盤・生活環境分野の生活基盤に関する項目、産業分野の満足度が低く、これらに課題を残しているといえます。

なお、34項目のうち、満足度がプラス評価の項目が15項目、マイナス評価の項目が19項目で、マイナス評価の項目がやや多くなっています。

町の各環境に関する満足度（町民）

（単位：評価点）



③ 町の各環境に関する重要度（町民）

■重要度が高い項目

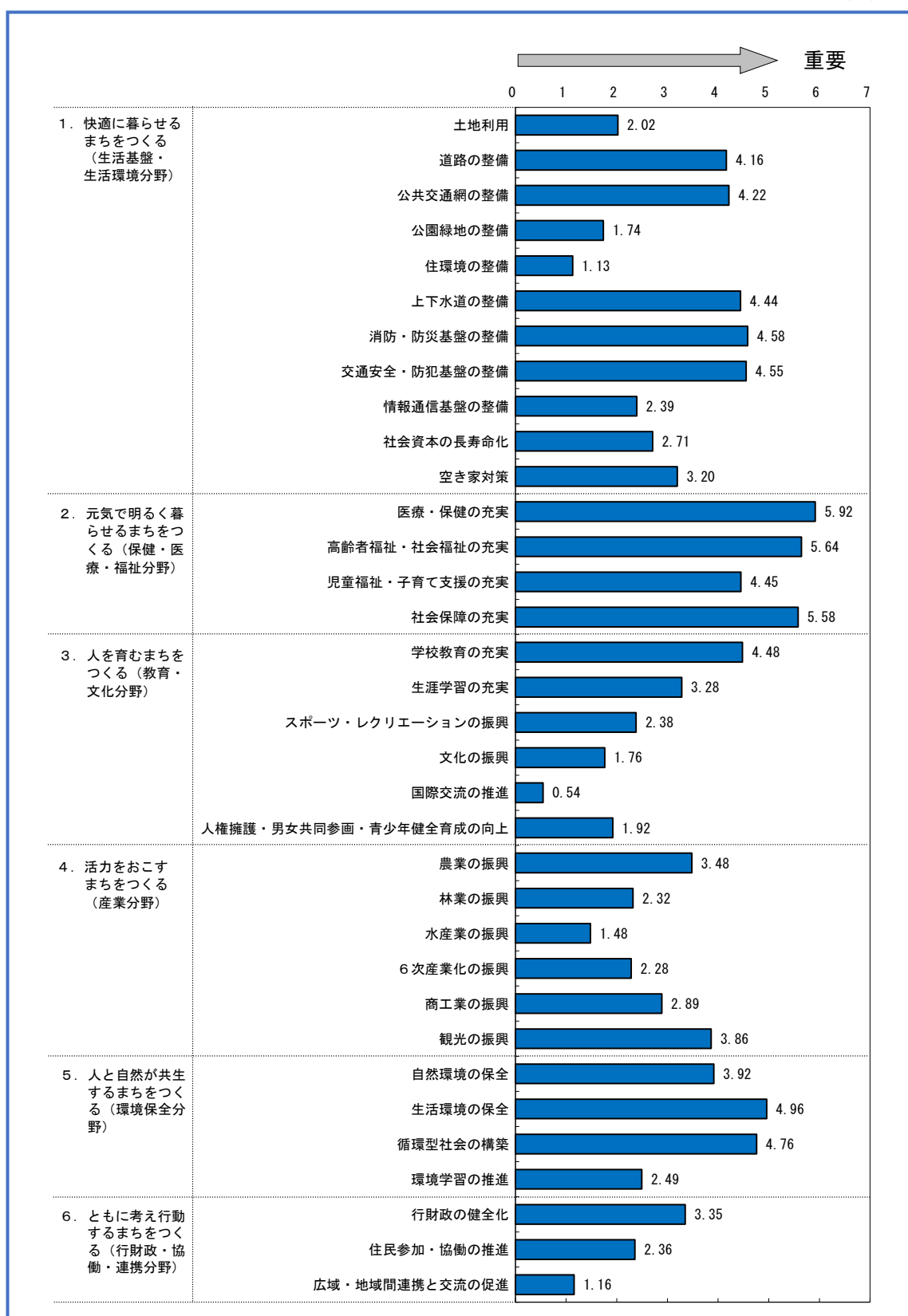
- 第1位 医療・保健の充実
 - 第2位 高齢者福祉・社会福祉の充実
 - 第3位 社会保障の充実（介護保険、国民健康保険等）
 - 第4位 生活環境の保全（生活排水処理、公害防止、環境美化等）
 - 第5位 循環型社会の構築（リサイクル、省エネ、再エネ等）
 - 第6位 消防・防災基盤の整備
 - 第7位 交通安全・防犯基盤の整備
 - 第8位 学校教育の充実
 - 第9位 児童福祉・子育て支援の充実
 - 第10位 上下水道の整備
-

満足度と同じ各環境（6分野34項目）について、「重視している」から「重視していない」までの5段階で評価してもらい、点数化しました。

その結果、上記のとおりで、これら上位10項目をみると、保健・医療・福祉分野の項目が4項目、生活基盤・生活環境分野の生活環境に関する項目が3項目、環境保全分野の項目が2項目、教育・文化分野の項目が1項目で、“保健・医療・福祉の充実”をはじめ、“安全・安心・快適な生活環境の整備”、“環境の保全”、そして“学校教育の充実”が重視されていることがうかがえます。

町の各環境に関する重要度（町民）

（単位：評価点）



④ 今後のまちづくりの特色（町民・中高生・小学生）

■今後のまちづくりの特色

【町 民】

- 第1位 安全・安心のまち
- 第2位 健康・福祉のまち
- 第3位 子育て・教育のまち

【中高生】

- 第1位 安全・安心のまち
- 第2位 快適住環境のまち
- 第3位 観光・交流のまち

【小学生】

- 第1位 安全・安心のまち
 - 第2位 環境保全のまち
 - 第3位 健康・福祉のまち
-

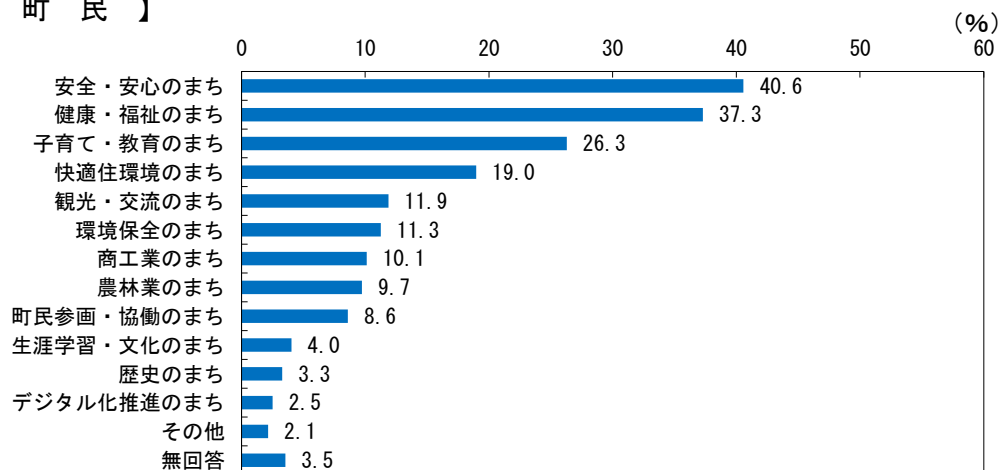
今後どのような特色のあるまちにすべきかについては、町民では、「安全・安心のまち」と「健康・福祉のまち」が他の回答を引き離して第1・2位を占め、“災害や犯罪、事故からの安全性の確保”と“保健・医療・福祉の充実”が強く望まれていることがうかがえます。

また、「子育て・教育のまち」と「快適住環境のまち」についても、以下を引き離しており、“子育て環境・教育環境の充実”や“快適な居住環境の整備”を望む人も一定数にのぼっています。

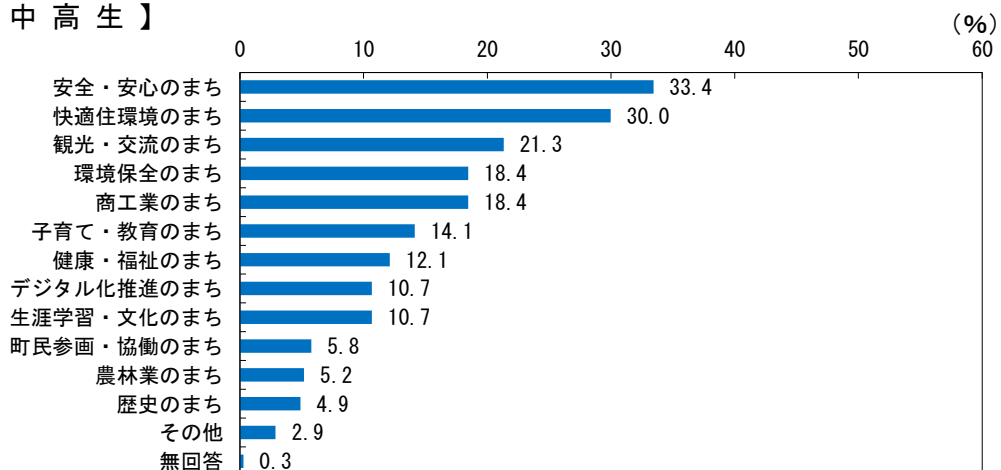
中高生では、「安全・安心のまち」と「快適住環境のまち」、小学生では、「安全・安心のまち」に回答が集中する傾向にあり、町民・中高生・小学生ともに「安全・安心のまち」が第1位で、世代を問わず、“災害や犯罪、事故からの安全性の確保”が最も重視されていることがうかがえます。

今後のまちづくりの特色（町民・中高生・小学生）

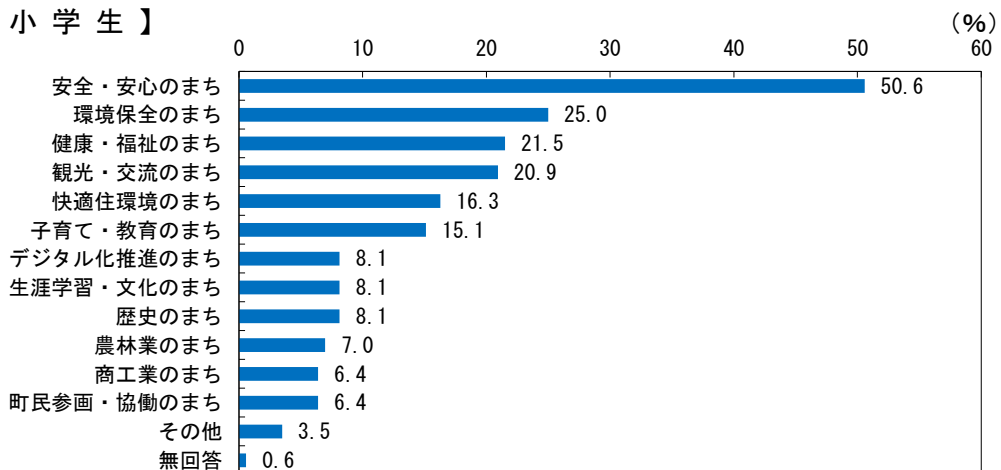
【町民】



【中高生】



【小学生】



（２）『なかがわまちづくりトークカフェ』にみる町民の提案

『なかがわまちづくりトークカフェ』では、意見交換会のまとめとして、「最後に一番いいこと1つ（高校生は自分が町長になったら行うこと1つ）」をお聞きしました。

その結果を一覧にすると、次のとおりで、「公共交通の充実」、「子育て支援の充実」、「情報発信の強化」が多くの人からあげられています。

『なかがわまちづくりトークカフェ』にみる町民の提案

グループ	最後に一番いいこと1つ (高校生は町長になったら行うこと1つ)
1 高校生グループ	<ul style="list-style-type: none"> ◆ アパレル店を建てる。 ◆ バスの便を増やし、幅広い年代が使えるようにして生活しやすくする。 ◆ 馬頭商店街の近くに泊まれるような施設をつくり、夜の景色などを活かせるようにする。 ◆ SNSを使っておいしい食べ物、お店、歴史、イベントを紹介する。 ◆ 交通の便をよくして町外から人が来るようにする。 ◆ ご飯屋さんのパンフレットをつくる。 ◆ 環境づくりをする（ソーラーパネルが多くなり、景色が悪くなっている。また、山は定期的に清掃し、川もごみ拾いをする。アユが泳ぐ昔ながらの環境を守る）。
2 保健・医療・福祉分野グループ	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 情報発信、子育て世代の住環境づくり（新築）。 ◆ やさしい人づくりとボランティアの養成（ボランティア教育の充実）。 ◆ 人を増やすための住宅の補助や土地の提供（住むところが重要）。 ◆ 若い人達が故郷に戻るような子育て支援を。
3 若手職員グループ（その1）	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 情報発信に力を入れる。 ◆ 子育て世代の人口流出を食い止めるための町としてサポート（生活・教育・雇用）。 ◆ 図書館の合併・新設 ◆ 人が集まる場所の整備・確保（1つでもよいので）。 ◆ 道をきれいにする。

グループ	最後に一番いいこと1つ (高校生は町長になったら行うこと1つ)
4 教育・文化分野グループ	◆ レンタサイクルでまちめぐりを（観光地スポットをつなぐ）。
	◆ 自然豊かな、よいことのある那珂川町を発信していく。
	◆ 体育館の屋根の塗装を行う。
	◆ 魅力的なまちづくりをして、外へ出る人を減らす。
	◆ 文化の薫り高い町を発信する。
	◆ 豊かな資源にあふれる町であり、行政も町民も自信を持ってやっていけるPR活動を。
5 地域おこし協力隊グループ	◆ 移住・定住施策の充実（人がこれ以上減らないように）。
	◆ 子育て支援の充実（戻ってきたいと思える町に）。
	◆ 愛郷心の育成（みんながよいまちだなと思えば、子どもの自信にもつながるし、発信力の強化にもつながる）。
	◆ 保健・医療・福祉の充実（安心して暮らせるように）。
6 子育て世代グループ	◆ 知名度向上・情報発信（子育てしやすいことなど住みたいと思えるような情報発信。方法も工夫が必要）。
	◆ アピールが必要（何か1つ、テレビで取り上げてもらえるようなものをつくってアピールする）。
	◆ 子どもの選択肢を増やす（習い事など選択肢を増やしてあげたい）。
7 若手職員グループ (その2)	◆ 道路・交通（橋を含む）の整備。
	◆ 交通アクセスの整備（住みたくなるような）。
	◆ 子育て世帯への支援の充実。
	◆ 出産祝金、入学祝金など、子育て世代への祝金の支給。
8 まちづくり団体（こくばんくるま）グループ	◆ 全国レベルで戦える情報発信が専門のプロを呼び、戦略的に情報発信する。
	◆ 資源はよいものがたくさんあるので、それをブラッシュアップしてPRする（そのためには、町内の連携体制が重要）。
	◆ 町民の意識を変え、シビックプライドを持ち、自分事として関わる人を増やす（町の底力が上がる）。
	◆ 笑って明るくしているところ、みんなで楽しく過ごしているところをみせることが大切（人も増える）。
	◆ 町をあげての消防団の維持・充実（消防団への加入促進等）。



5 まちづくりの課題

本町の人口の状況をはじめ、活かすべき強みや社会情勢、町民ニーズ等を総合的に勘案し、これからのまちづくりの主要な課題をまとめると、次のとおりです。

(1) 最重要課題

人口減少の抑制による活力ある那珂川町の維持

県内一のスピードで人口減少が進み、多くの分野で担い手が不足し、町全体の活力の低下が懸念される中、本町の最重要課題は、「人口減少を抑制し、活力ある那珂川町を維持していくこと」です。

町民がずっと住み続けたい、子どもを産み・育てたいと思うまちづくり、町外の人に移り住みたいと思うまちづくりを進めていくためには、少子化対策や移住対策などの特定の取り組みだけではなく、様々な分野における様々な取り組みを一体的に進め、町の各環境の総合的なレベルアップを進めていく必要があります。

(2) 分野別の課題

1 危機管理と環境保全を重視した生活環境の整備

人々の危機管理への意識がさらに高まる中、“災害や犯罪、事故からの安全性の確保”を求める町民ニーズが強く、アンケート調査の『今後のまちづくりの特色』において、「安全・安心のまち」が、町民・中高生・小学生ともに第1位となっています。

また、地球規模で環境保全や脱炭素社会の実現が求められる中、“快適な生活環境の整備”や“環境の保全”も望まれており、アンケート調査の『今後のまちづくりの特色』において、「快適住環境のまち」が中高生の第2位、「環境保全のまち」が小学生の第2位となっています。

このため、美しい自然環境・景観や貴重な歴史文化資源との共生を基本に、あらゆる危機に強いまちづくり、快適で環境にやさしいまちづくりを推進し、町民が住み続けたい、町外の人に移り住みたくなる生活環境の整備を進めていく必要があります。

2 地域に密着した保健・医療・福祉体制の整備

国や県の水準を大幅に上回る勢いで高齢化が進む中、“保健・医療・福祉の充実”を求める町民ニーズが強く、アンケート調査の『今後のまちづくりの特色』において、「健康・福祉のまち」が、町民の第2位、小学生の第3位となっているほか、『町の各環境に関する重要度』において、「医療・保健の充実」と「高齢者福祉・社会福祉の充実」が第1・2位を占めています。

このため、これまで整備してきた保健・医療・福祉環境や、やさしく郷土愛あふれる町民等をさらに活かしながら、地域に密着した保健・医療・福祉体制の整備を図り、すべての町民が支え合いながら健康で幸せに暮らすことができる環境づくりを進めていく必要があります。

3 子育て支援の充実と特色ある教育・文化環境の整備

国や県の水準を大幅に上回る勢いで少子化が進む中、また、学校教育に対する関心がますます高まる中、“子育て環境・教育環境の充実”を求める町民ニーズが強く、アンケート調査の『今後のまちづくりの特色』において、「子育て・教育のまち」が、町民の第3位となっているとともに、『なかがわまちづくりトークカフェ』において、子育て支援を充実してほしいという意見が多くあげられています。

このため、充実した子育て環境・学校教育環境等をさらに活かしながら、子育て支援の一層の充実を図るとともに、未来を担う人材の育成に向けた学校教育環境の充実、町民主体の学習・文化・スポーツ活動の活発化、貴重な歴史文化資源を活かした文化の薫り高いまちづくりを進めていく必要があります。

4 将来にわたって持続可能な産業の育成

地方の産業・経済が厳しさを増す中、本町においても、各産業をめぐる情勢は厳しく、アンケート調査の『町の各環境に関する満足度』において、産業分野の項目の満足度が低くなっています。

また、本町には、自然資源や歴史文化資源をはじめ、多彩で魅力ある観光資源がありますが、これらを有効に活用した“多くの人が訪れるまちづくり”が望まれており、アンケート調査の『今後のまちづくりの特色』において、「観光・交流のまち」が、中高生の第3位となっています。

このため、多彩で魅力ある観光資源や多様な産業と特産品に恵まれたまちとしての特性等をさらに活かしながら、将来にわたって持続可能な産業の育成を進めていく必要があります。

5 未来を見据えた都市基盤の整備と情報発信の強化

本町が、人口減少を抑制し、将来にわたって活力を維持していくためには、これまでみてきた生活環境の整備や保健・医療・福祉体制の整備、子育て環境・教育環境の充実、産業の育成はもとより、それらを支える都市基盤の整備や、すべての分野における情報発信の強化が必要です。

しかし、アンケート調査の『町の各環境に関する満足度』において、「公共交通網の整備」や「土地利用」といった都市基盤に関する項目の満足度が低くなっているほか、『なかがわまちづくりトークカフェ』において、公共交通を充実してほしいという意見や、情報発信を強化すべきであるという意見が多くあげられています。

また、デジタル化が急速に進む中、本町においても、すべての町民がデジタル技術の恩恵を受け、便利で楽しい生活を送れるよう、デジタル化を積極的に進めていくことが求められます。

このため、町民の利便性・安全性をさらに高める視点に立ち、道路・公共交通の充実やデジタル化をはじめ、未来を見据えた都市基盤の整備と情報発信の強化を進めていく必要があります。

6 「町民力」の結集と行財政運営のさらなる効率化

地方の自立が求められる中、限られた人材や財源を有効に活用しながら、自立した町を創造し、将来にわたって持続させていくためには、「町民力^{※10}」をさらに結集するとともに、行財政体制を一層強化していくことが求められます。

しかし、アンケート調査の『町の各環境に関する満足度』において、行財政・協働・連携分野の項目の満足度が低くなっています。

このため、やさしく郷土愛あふれる町民等をさらに活かしながら、町民や町民団体、民間企業等の多様な主体の力を結集するとともに、行財政運営のさらなる効率化を進めていく必要があります。

※10 本町でいう「町民力」とは、「一人ひとりが那珂川町の未来を考え、自主的・自発的に、関係者と協働しつつ、地域の課題解決や地域の振興に向けた活動を行う能力」を指す。

第 2 部 基本構想

第1章 那珂川町の将来像

1 まちづくりの基本姿勢

「第1部 総論」を踏まえ、「人口減少の抑制による活力ある那珂川町の維持」を見据え、これからのまちづくりにおいて、すべての分野にわたって基本とする姿勢を次のとおり定めます。

1

安全・安心でやさしいまちづくり

町民一人ひとりの命と暮らしを大切にし、災害をはじめ、あらゆる危機に強い安全・安心なまちづくり、健康・福祉と自然との共生を重視した人と環境にやさしいまちづくりを進めます。

2

“那珂川スタイル”の創造と発信

本町ならではの地域資源やこれまでの取り組みを活かし、さらに磨き上げ、新たな価値、“那珂川スタイル”を生み出し、全国・世界に向けて情報発信し、広く知られるまちづくりを進めます。

3

人と人とのつながりの強化

町民同士のつながり、町民、町民団体、民間企業、高等教育機関、他自治体等と町とのつながりをこれまで以上に強め、多くの主体が“自分事”として参画・協働するまちづくりを進めます。

2 将来像

将来像は、本町が10年後に目指す姿を示すものであり、本町にかかわるすべての人々の共通目標となるものです。

今後、本町は、すべての分野において、美しい自然環境・景観や貴重な歴史文化資源をはじめとする本町の強みを最大限に活かしながら、『安全・安心でやさしいまちづくり』・『“那珂川スタイル”の創造と発信』・『人と人とのつながりの強化』を基本としたまちづくりを進めます。

そして、住み続ける町民、子育て世帯、観光客、関係人口、移住者が増え、人口減少が抑制され、多くの人々が未来への期待にわくわくして暮らしている、10年後の那珂川町の姿を思い描き、将来像を次のとおり定めます。

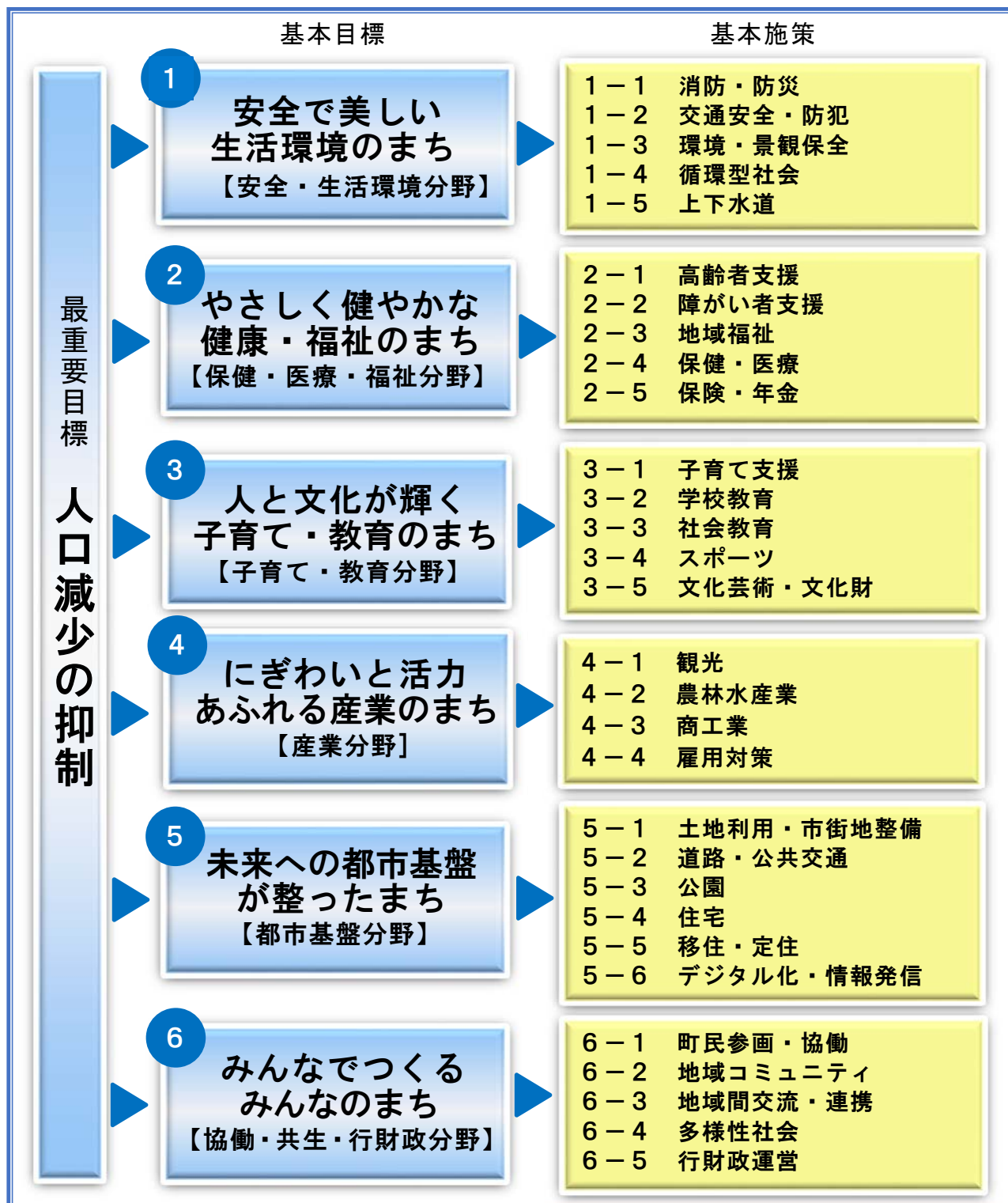
なかがわの 輝きとうるおいにみちあふれた わくわくするまち



第2章 計画の体系と方針

1 計画の体系

将来像の実現に向け、計画の体系を次のとおり定めます。



2 基本目標ごとの方針

(1) 安全で美しい生活環境のまち

- 1－1 消防・防災
- 1－2 交通安全・防犯
- 1－3 環境・景観保全
- 1－4 循環型社会
- 1－5 上下水道



あらゆる危機に強い安全・安心なまちづくりを進めるため、消防団の充実や広域的な連携による消防署間の連携強化、地域における自主的な防災活動の促進をはじめ、消防体制、防災・減災体制の一層の強化を図るほか、子どもや高齢者の安全確保を重点とした交通安全・防犯対策を推進します。

また、本町ならではの美しい自然環境・景観の保全、脱炭素社会の実現、そして誰もが住みたくなる快適な生活環境の整備に向け、総合的な環境・景観保全施策の推進、廃棄物の減量化・資源化の促進と広域的な処理体制の充実、安全でおいしい水の安定供給、下水道施設の適正管理、合併処理浄化槽の普及促進を図ります。

(2) やさしく健やかな健康・福祉のまち

- 2－1 高齢者支援
- 2－2 障がい者支援
- 2－3 地域福祉
- 2－4 保健・医療
- 2－5 保険・年金



高齢者や障がい者が住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けることができるよう、福祉・介護サービスの提供体制の充実や社会参加の促進に努めるとともに、誰もが“自分事”として支え合い助け合う地域福祉活動の促進に努めます。

また、すべての町民が健康寿命を伸ばし、健やかで幸せに暮らすことができるよう、町民の健康管理意識の高揚と自主的な健康づくりの促進を基本に、地域に密着した保健サービスの提供を図るとともに、町内の医療機関との連携や広域的な連携のもと、地域医療体制の維持・充実に努めます。

さらに、国民健康保険・国民年金の制度周知と適正運営に努めます。

（３）人と文化が輝く子育て・教育のまち

- 3－1 子育て支援
- 3－2 学校教育
- 3－3 社会教育
- 3－4 スポーツ
- 3－5 文化芸術・文化財



子どもがすくすくと健やかに育つよう、「こども家庭センター」を拠点に、妊娠・出産から子育て期まで切れ目のない支援を一層推進します。

また、子どもたちが、生きる力を身につけ、明日を担う人材として育つよう、本町ならではの特色ある教育活動を推進するとともに、今後の学校のあり方を検討し、それに基づく取り組みを進めます。

さらに、町民が生涯にわたって学び、活動し、豊かな暮らしを送ることができるよう、社会教育環境の充実、多様なスポーツの普及、町民主体の文化活動の促進に努めるほか、歴史文化の薫り高いまちづくりを一層進めるため、貴重な文化財の保存・活用、資料館・美術館等の整備充実・利用促進に努めます。

（４）にぎわいと活力あふれる産業のまち

- 4－1 観光
- 4－2 農林水産業
- 4－3 商工業
- 4－4 雇用対策



観光客の増加による地域経済の活性化、観光から移住への展開を視野に入れ、「道の駅ばとう」をはじめとする観光資源の充実・活用や新たな観光資源の掘り起こし等を進めます。

また、農業の維持と新たな展開に向け、多様な担い手の育成・確保、農産物の一層のブランド化の促進をはじめ、多面的な農業振興施策を推進するとともに、森林の適正管理・整備の促進、水産業における安定生産の促進に努めます。

さらに、商工業の振興に向け、商工業事業所の経営の継続・安定化の支援、創業の支援、新たな企業の誘致、特産品の振興に努めるほか、これら産業振興施策と連動し、雇用の確保・拡大に向けた取り組みを進めます。

(5) 未来への都市基盤が整ったまち

- 5-1 土地利用・市街地整備
- 5-2 道路・公共交通
- 5-3 公園
- 5-4 住宅
- 5-5 移住・定住
- 5-6 デジタル化・情報発信



未来を見据え、計画的な土地利用・市街地整備を進めるとともに、那珂川を渡河する新たな道路の整備や国道・県道の事業促進、高規格道路の早期事業化に向けた関係機関への要望、町道の整備を積極的に実施します。公共交通については、路線バス・コミュニティバスの運行継続への支援、町民ニーズに応じたデマンドタクシーの運行の充実と利用促進に努めます。

また、レクリエーション・憩いの場として、公園の整備充実を進めるほか、安全で快適な住生活の基盤として、町営住宅・町有住宅の適正管理や空家の適正管理の促進に努めます。これらの住宅施策と連動し、分譲宅地の整備や地域資源情報バンク・移住相談の充実、経済的支援の推進など、移住・定住を直接的にサポートする施策を推進します。

さらに、町民サービスの向上と地域活性化に向け、行政及び地域におけるデジタル化を進めるとともに、これとの連動等により、全国・世界に向けた町の情報発信を積極的に推進します。

(6) みんなでつくるみんなのまち

- 6-1 町民参画・協働
- 6-2 地域コミュニティ
- 6-3 地域間交流・連携
- 6-4 多様性社会
- 6-5 行財政運営



多様な力を結集したまちづくりを進めるため、町民や町民団体、民間企業等の参画・協働体制の強化を進めるとともに、支え合う地域コミュニティの再生と創造に向け、行政区等の自主的な活動を支援していきます。

また、地域活性化や人材の育成、関係人口の拡大を目指し、国内外の地域との交流・連携や教育機関・企業等との連携を進めるほか、ともに生きる多様性社会の実現に向け、意識啓発等を進めます。

さらに、行財政運営の効率化に向け、さらなる行財政改革の推進やふるさと納税の有効活用、地域おこし協力隊の採用、広域連携の強化を図ります。

第3次那珂川町総合振興計画「なかがわ『わくわく』プラン2035」総論・基本構想の構成

